
貴女に依存して・・・

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴女に依存して・・・

【Nコード】

N9568I

【作者名】

雲天道風

【あらすじ】

親友の綾に依存してしまっている風。

自分の汚い感情を出さないように気持ちを制御しているが、ある綾の言葉によって、風の隠していた気持ちが表にでてしまう。

風はこれからどうなってしまうのか？

（前書き）

恋愛表現のつもりはないんですけど、結果てきにG Lな感じになっ
ています。
キスなど、そういうもろG Lてきなものはないので安心してくださ
い。

いつも貴女のことを思い続けていた。

貴女はあたしには友情しか抱いていないだろうけど・・・

あたしだってこれは友情・・・のつもりだけといつからか、貴女に依存してしまっている自分がいた。

『ねえ、風は今日空いてる？』

『うん。今日は暇だよ。久々に二人でどっかいこっか？』

『あつ、愛もいるよ』

『そう・・・じゃあ、三人で』

あたしは笑顔で貴女に返事を返した。

だけど心の中ではなんで愛がいるの？何で二人つきりじゃないの？そんな疑問ばかりが浮かんできた。

だって、綾は愛がいると、いつも愛をからかって遊んでいる。

あたしはその間は笑ってみてるけど、本当は愛のことを憎んでいる。どうしてそんなに綾に気にいられてるの？

綾はあたしのものなのに・・・

現に綾とあたしは仲がいい。大親友だってあたしは思ってる。

夏休みや、春休みや、冬休みとか、後土日とか、二人が暇だったらいつも遊んでた。

だけど最近、綾は他の子と遊ぶことが多くなってきた。

それはあたしにも原因があるんだけど・・・

最近忙しくて綾と遊ぶ時間がない。メールは毎日かかさずしているけど、会う時間もない。

学校でもクラスは別々で、会えるのは放課後ぐらい・・・

休み時間もあたしはクラス委員長だから忙しい。

『あつ、風こつちこつち！』

集合時間に行くと、愛はまだ来ていなくて、綾が一人でした。

『お待ちせ。いこつか』

『ちよつ、愛まだだよ』

『ああ、そういえばいたつけ・・・』

あいつの存在なんてなければいいのに、そんな思いをこめて言った台詞は、綾には冗談にとられた。

『風酷いよ〜』

冗談のように笑いながら言っている綾。

この笑顔をあたしにだけ向けてくれればいいのに・・・

『お待ちせ』

そんなことを考えていたら愛が来た。

『綾、見て〜』

愛は綾に新しいバッグを見せていた。
確か今日話してた気がする・・・

綾はバッグとかブランド系を集めるのが好きで、家にはあらゆるバッグがある。

『可愛いね。じゃあ、いこ』
あたしは愛のバッグを見て話題を終わらせようと冷たく言っと、綾の手をとって歩き始めた。

『もう、風冷たい』

愛が後ろから小走りで近づいてきて、あたしをこずく。

『そんなことないもん』

あたしも遊びのように相手をする。

だから誰もあたしが綾に依存してるって知らない。

決して表には出さない。そんなことをしたら綾に嫌われてしまうだろうし、それに表に出してしまえば、あたしがあたしでいられなくなる気がするから・・・

ただとあんなことがあってしまったから、あたしはあたしでいられ

なくなってしまった・・・

ある日綾は照れくさそうな顔をして、真剣な話をしたいってあたしを呼び出してきた。

『綾、利人に告られたの・・・どうしようかな』

それはとても予想外で、とても残酷で、あたしをずたずたにした。

『どうするって、綾は利人が好きなの？』

『うーん・・・好きっていうか・・・嫌いじゃないんだけど・・・好きかはわからないかな』

照れくさそうに微笑んでいる綾は、とても嬉しそう。

何でそんなに楽しそうな顔してるの？それはあたしにだけ向けられるといい、他の人なんて考えないで・・・

『そうなんだ・・・綾は付き合いたいと思うの？』

あたしはもう壊れているのかもしれない。

だけどそんな異変に綾は気づいていない。

気づかないで・・・それに、あたし元に戻って！

このままじゃきつと綾を傷つけてしまっ、それはダメ・・・

『まあ、彼氏は欲しいんだけど・・・でもとりあえず付き合ってみるっていうのも、いいかな？』

とりあえず、付き合う？

その言葉であたしの心はもう完璧に壊れてしまった。
汚い感情が表に出てくる。

『何で？どうして？綾はあたしだけを見てればいい。あたしにだけ微笑みかけてよ。何で彼氏なんて作ろうとするの？ダメだよ・・・そんなことしたら、あたしという時間がなくなっちゃうよ？』
『えっ？』

綾は驚いたようにあたしの顔を見て黙っていた。

『ねえ、貴女はあたしのこと、好きでしょ？あたしの親友でしょ？』

『凧は、綾の親友だけど・・・どうしたの凧？何だか変だよ？』

綾は少し怯えているようにも見えた。

無理もないよね。今まであたしがこんなこと言わなかったんだから・・・言わないように、していたんだから・・・

『変にさせたのは綾のせいだよ。綾が大好きなの。ずっと一緒にいようよ。あたしなら綾の好きな物なんでも知ってる。綾と楽しいことだって出来る。だけど利人は、貴女のことを知らない』

『綾の・・・せい？どういうこと？もしかして・・・さ、利人が好きなんじゃないの？もう、そうならそうって言うてよ』

綾は笑いながら言っているけど、顔が全然笑っていない。綾も気づいてるんだと思う。

それは違うって・・・

『何言ってるの？綾がすきなんだよ。あたしは綾さえいれば何もいらないから・・・ねえ、綾、今日遊ぼうよ。ゆっくり話そう？』

『そうだね。それがいいよ』

綾はあたしが今何かでおかしくなってると思っている。頭を冷やせば治ると思っているに違いない。

だけどあたしのこの気持ちはそんなものじゃ治らない。

一度この汚い感情が出てしまったら、もう隠すことだって出来ない。

自分の意思とは関係なく、本能のままに貴女を求めている。

何かをしたいわけじゃない。貴女をどうにかしたいわけじゃない。ただずっと傍にいてほしい。

別に恋愛感情を抱いているわけじゃない。

だけど正直それよりも危ないものなのかもしれない。
依存・・・あたしのは依存なんだ。

『風』

約束通り綾は来てくれた。
いつものように笑顔だ。

『綾、来てくれたんだね』

あたしはいつものままじゃない。

『呷、大丈夫？』

『何が？』

『さっき変だったよ？』

しばらくの間が空く・・・

どうして今は黙っていたのだろうか？

気持ちを整理する時間ができたのだろうか？

『変じゃないよ。綾が好きなんだよ』

『放課後・・・利人に返事をしてきたの。付き合ってくださいって』

綾は嬉しそうな顔で言っていた。

あたしの言葉を見無視するかのように・・・

『それで？』

『利人と付き合うことになったの。やっぱりいい人だしさ。付き合
ってよかったのかもしれない。帰りも送ってもらったんだ』

『へえ・・・利人か・・・あいつがあたしの綾を奪ったんだね。綾、
目覚ましてよ。あたしは呷だよ。貴女とずっと一緒にいる人だよ。
利人なんて人にだまされちゃダメだよ。あれは貴女とあたしの関係
を切り離す悪魔だよ？』

『な・・・ぎ？』

綾は心底怯えた顔をしていた。
ただ綾はあたしのことをただ怖がるだけじゃなくて、心配をして
くれている。

『風、目覚ますのは貴女だって！本当どうしちゃったの？あたしは
ここにいるって、風を一人ぼっちにはさせないよ』

『そっか』

その言葉であたしは正気に戻れた。

綾の言葉一つであたしの心は大きく動く。

貴女があたしの心を大きく動かせる。

『ねえ、綾はあたしのこと好き？』

『当たり前でしょ』

綾は笑顔で答えてくれた。

貴女の笑顔はやっぱり素敵。

だからその笑顔は、他の人には見せないで・・・

次の日の学校で・・・あたしは信じられないものを目撃してしまっ
た。

『綾、おはよう！』

『なぎ！？』

『どうしたの？』

『あっ、風ちゃんか。今取り込み中だからさ』

綾の向こう側には利人がいた。

利人はそういうとあたしの目の前で堂々と綾にキスをした・・・

利人の唇と、綾の唇が重なる。

どんどん深いものになって、いやらしい音が鳴る。

聞いているだけで頭がおかしくなってきた。

何で？何で今こいつはあたしの綾に・・・

許さない！

あたしはバッグを開けると、筆箱の中からカッターを手にした。

そのカッターの刃をゆっくりと出すと、利人へと向けた。

『う・・・あ』

『キヤー！尻？』

気がついたら利人の背中に突き刺していた。

後は頭が真っ白のまま夢中で倒れた利人の腹を刺していた。

綾がどうなっているのかなんて見えない。

『尻！』

かけつけてきた先生によつて押さえ込まれてしまった。
カッターを取られて、動けないようにされる。

『こいつが悪いんだ。あたしから綾を奪うから、こいつは敵だ！悪魔だ！殺せ！殺してしまえ！』

あたしは夢中で叫んだ。

涙が溢れ出してとまらない。

今綾はどうしているのか、おさえこまれて見えない。

『風！おちつきなさい！』

そこであたしは意識を手放した・・・

目を覚ますと、ベッドの上にいた。

どうしてこんなところにいるのだろうか？

空白の記憶は戻ってこない。

あたしは何かをしてしまったのだろうか？

自分の手につく赤いものを見て悲鳴をあげそうになった。

『何？これ』

『風、目が覚めたか？落ち着いたか？ゆっくり話してごらん』

先生はあたしの目を見ながらおちついた調子で尋ねてくる。

『何があっただんですか？この血は誰のですか？あたしはどうしてここにいるんですか？』

あたしの必死の問いに、先生は目を丸くしていた。

『綾は？綾はどこですか？』

『綾なら・・・君の隣のベッドで眠っているよ。相当ショックなようだね・・・』

先生の言葉を最後まで聞かずに、あたしは綾のベッドまで行った。

綾の手と制服に血がついていた。

あたしがやってしまったのか？と、一瞬怯えてしまったが、よく見ると綾から出たものではなかった。

『とりあえず君は警察にいこうか』

『あたし、誰か殺しちゃったの？』

『死んではいないようだけど・・・利人君刺してしまったようだ・・・』

『あつ・・・』

その瞬間空白の記憶がよみがえってきた。

『そうか。あたしあいつを・・・綾、もう心配ないよ。あいつはしばらく動けないと思うよ。貴女はあたしとずっと一緒よ。嬉しいですよっ。』

眠っている綾の頬に頬をすりつける。愛おしく、優しく綾を可愛がる。

『凧・・・』

後ろで先生が硬直していて、その後ろにも警察がいて、警察はあたしをつれていこうとしたみたいだけど、その光景に硬直してしまっ
たみたいだ。

『綾・・・大好きだよ。ずっと一緒だよ。ねえ、二人だけの世界に
いようよ』

あたしはそういうと、綾の近くにあつたはさみを手にした。

『やめなさい!』

その時先生と警察たちが、目を覚ましたようにあたしを止めた。

どうして?どうしてあたしの愛はとめられてしまうの?

これはあたし達ん問題なんだから、他人ははいつてきてほしくない
のに・・・

『この子は刑務所よりも、精神を安定させる別のところにいれたほ
うが・・・』

そしてあたしは綾のいないところへ連れて行かれてしまった。
大切なものが近くにいない空白の心は誰にも埋めることはできない。

だけど、あたしは毎日綾と一緒にいるんだ。

『綾、今日あたしね新しいバッグ買ったんだよ。あなたのために・
・コレクションにいれる?』

御門凧は毎日綾という女の子に話しかけている。

まるでそこに彼女がいるように、自分の世界に入ってしまった・・・
私達が話しかけても、無視をしているのではなく、気づいていない
様子でいる。

何日も食事を口にしていないことだけが、私たちにとっては気がかりで仕方がない。

綾という女の子をここに連れてきたほうがいいのか?

だけでもそれをしてしまっでは、また彼女が同じことをしてしまうに違いない。

今の彼女にとっては、そうすることが一番のしあわせなのかもしれないが、綾という子は願ってもいない。私たちにとっても、二つもの命を失うことは、大変悲しく思う・・・

『ずっと一緒だよ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9568i/>

貴女に依存して・・・

2010年12月31日20時57分発行